

家庭との連携を考慮に入れた保育に関する研究—子育て支援の一環として—

吉田ほほ

(兵庫教育大学大学院生)

研究目的

家庭と保育の場との連携で、最も小さな単位は養育者と保育者の連携である。そして、家庭との連携を考慮した保育となると、その中心に子どもが置かれ、子ども・養育者・保育者の三者が存在している中で保育が行なわれる。つまり、家庭との連携を考慮に入れた保育は、この三者の連携がなければ成り立たない。

本研究では、保育の現場に求められている子育て支援の一環として行なわれる、家庭との連携を考慮に入れた保育において、子どもを中心とした三者が良好な関係を成立させるための手がかりとなるものを、実際の保育の現場から見出そうと試みた。そこで、子ども・養育者・保育者が確実に揃う時間である登園時間の観察を通して研究を進め、入園したばかりの養育者と子どもの変化を追うことによって、それぞれが新しい環境で保育者との信頼関係を築くまでに必要としているものは何かについて知り、また、その思いを受け止める保育者の姿から、家庭との連携を深める保育のあり方について考察した。

研究方法

平成 13 年 (2001) 5 月より 7 月および平成 14 年 (2002) 4 月より 7 月まで兵庫県内 F 園にて、登園時の関わりについて VTR 収録を行なった。観察時間は、子どもが登園してから自由な遊びの間に行なった。

F 園では、次の 2 点について VTR 収録を行なった。

- (1) 仲間同士遊べない幼児およびその養育者と保育者、また幼児から離れることのできない養育者およびその幼児と保育者との関わり。
- (2) 登園時の三者関係から、登園後、幼児が遊びを見つけて思いを出して遊ぶまで。

撮影にはデジタルビデオカメラ 1 台を用い、固定はせずに観察者が遠方 (保育室外) から撮影した。音声、ビデオに写っていない細かな点については撮影後、筆記記録をすることで補った。子どもの自然な姿を観察するため、保育室内に入るときは VTR 収録を行わず、筆記記録とした。ただし、子どもが観察者との関わりを求めた場合は撮影を止め、関わりが終わった後に筆記記録した。

平成 14 年 (2002) 5 月より 7 月まで、兵庫県内 M 園にて登園の様子について、週に 1~2 回、実際に現場で子どもたちと触れ合いながら観察を行った。また、2001 年 10 月より 2002 年 2 月まで、子ども達の日常生活全般の内面理解を深めるために先と同様の方法で観察を行なった。記録の方法は観察中または観察終了後に筆記した。

事例からの考察

○養育者の思い

養育者の思いを知るために、母親から離れ難い子どもを持つひとりの母親について継続的に観察を行なった。子どもである A 児は 3 歳児クラスに入園したばかりであった。入園当初から、大きな声で泣く事はなかったが、母親とは離れにくく、母親と離れた後も保育者と共に行動することが多かった。母親は、なかなか自分から離れず、また、身支度の最中に他のことに興味に移り、他の子ども達よりもスローペースになってしまう A 児を見て、険しい表情を見せる事が多かった。

険しい表情で登園していた母親であったが、幼稚園生活や保育者と親しむうちに、A 児に対する関わりにも余裕が出てきた。母親は、喜んで保育室に入っていく A 児の姿を見て、保育者と顔を見合わせて、何も言わずに笑いあっている。このことから、母親は、A 児の姿を嬉しい気持ちを持って見ていることがわかる。これは、A 児の母親は育児の喜びを感じていると言うことができよう。保育者と母親はこのとき、何も会話を交わしてはいないが、A 児を介して気持ちを共有することによって、互いの信頼関係を深めることができたと言える。このことは、保育者と養育者が A 児を見守る喜びが感じられ、養育者と保育者が共に子どもを育てる喜びを見出していると言える。

○子どもの思い

次に、子どもの思いについて知ることを目的として、母親と離れることに不安を感じていると観察者が感じた B 児について、継続的に観察を行った。B 児は入園した直後から母親と離れるときに、泣くことはなかったが、母親が帰って行った方向をいつまでも保育室か

ら見ていることが多かった。

B 児は保育室内では、おもちゃの横にひとりで座っていることが多かった。しかし、おもちゃには全く興味を示していなかった。B 児は誰かが自分のそばに来た時だけ、それらを用いて関わっていることがわかった。また、関わりを持つことができた相手が去っていくと、おもちゃを置いて立ち上がって探したり、目で追っていた。ここから、B 児は、物的な環境よりも、関われる相手をもとめていると考えられる。子どもは、子ども自身が置かれている場において、精神的な安定を得なければ「遊びたい」という思いは育まれないと言える。

○保育者の受け止め

これまでの事例から、登園時には母親と子どもは、それぞれの思いを持っており、その思いを受け止めてもらえる場が必要であると言える。

次に、登園時間において、そのような子どもの思いと養育者の思いを保育者が受け止めている保育者について考察した。

C 児は泣きながら登園したが、担任とのやりとりや、母親に滑り台で遊びたいということを要求するなど、母親と保育者との関係を楽しんでいるようにも見えた。養育者はその要求に応え、保育者も止めずに、C 児の楽しい気持ちに添った発言をしている。C 児は自分の思いを受け止めてもらった後、自分から保育者に抱っこを求めている。

最初担任が「C ちゃん、おいで。」と言ったときは C 児は母親から離れなかった。これはまだ C 児が母親との関わりを求めているからと考えられる。しかし担任は無理に C 児を引き取るのではなく、C 児の思いに応えようとして、C 児を遊具まで連れて行った母親に合わせ、ふたりに「ええなあ。C ちゃん。」と声をかけている。ここでは、母親と C 児の二者の関係に保育者が「見て、言葉をかける」という形で参加し、三者の関係が成立していると言える。この段階では C 児と母親のつながりが強いが、C 児は滑り台から帰ってきた後、2 度目に保育者が言葉をかけた時には、自分から手を伸ばしている。このことから抱っこしてもらおう対象が代わることで、母親から保育者へと信頼関係を移行していることがわかり、C 児から保育者との関わりを求めたからと言える。

また、仕事のために、すぐに母親が仕事に行かなければならなかった D 児は、激しく泣いて来たが、保育者が状況を見て集まって来た。この時、互いに指示は

なかった。このことより、これらの行為は日常の保育の中で自然に行われていることであると考えることができる。集まってきた保育者たちは D 児に話しかけ、その間に担任は母親と会話している。担任は子どもの状態だけでなく、養育者の状態についても話を聞いている。その間も D 児には、他の保育者が関わっている。そして、母親が去っていくときには担任が D 児を抱きかかえていて、D 児が泣き止むまで担任は抱っこしたままテラスに座っていた。ここで、D 児は、どの時にも関わってくれる大人がいて、1 人になっていないことがわかる。

ここでは、保育者同士の支え合いが自然な形で行なわれていた。家庭との連携の基本には社会全体で子どもを育てるという、現在打ち出されている子育て支援の思想が根底にある。つまり、連携を図るということは、養育者と保育者の個人的なつながりを意味するのではなく、保育の現場に関わる者すべてが、ひとりひとりの子どもと養育者との関わりを深めるということである。

まとめ

登園時間は余裕のない時間であるからこそ、互いの思いが表出しやすく、三者の関係を良いものにも悪いものにも築き上げる。登園時間は、非常に慌しく、また、子どもと養育者の思いは各人で異なるものであるから、ひとりの保育者がすべての思いを即座に知り、それに応えていくことは難しい。しかし、本研究を通して出会った保育者の多くは、日々の生活に根ざした、信頼関係の構築の重要性を語っている。このことを大切にしている保育者は、慌しい登園時間であっても、日々の関わりを通して知った、子どもや養育者の思いを推し量りながら保育を展開していくことが可能となるのであろう。

登園時間は 1 日の始まりである。子ども・養育者・保育者が、毎朝のわずかな時間を大切にして、三者の関わりを持つことは、1 日を共に創り上げる者として互いに認め合うことであると言える。登園時間の良好な三者関係の成立は、結果としてそれぞれの育ちを喜び合うことにつながっており、そこには保育の本質が含まれているように感じた。養育者と保育者の二者が、直接子どもに関わる者であることを自覚し、子育ての共同体として保育を考えた上で、子どもに関わり、良好な三者の関係を築くことができる保育を、家庭との連携を考慮に入れた保育のひとつの方向性として考え、今後も取り組み続けたい。